
観光のまなざし

(*The Tourist Gaze 3.0*を読む)

加太宏邦

ご紹介にあずかりました加太でございます。本日はテーマに掲げられた著書の翻訳者であるということで、講演者としてご指名いただきありがたく存じます。この研究書をめぐる話しをせよというご依頼でしたので、拙いながら、いくつか、述べさせていただきます。どうぞ寛大に聞き流していただければと存じます。

1

本日のテーマに取り上げられた本というのは、ご案内のようにイギリスのランカスター大学のジョン・アーリー John Urry とデンマークの若い研究者ヨナス・ラーセン Jonas Larsen の共著による *The Tourist Gaze 3.0* です。主催者から、課題を三ついただきまして、①ジョン・アリーの議論の紹介②翻訳者として私の受けた感想、③本書を受けて観光研究はどのような議論を展開していくべきなのか、というものです。

いずれも荷が勝ちすぎる課題のようですが、本日は、せつかくの機会ですから、私なりに理解しました *The Tourist Gaze 3.0* につきまして、お話しをさせていただこうと思います。

じつは、私は、本書の著者に会ったことがありません。また、著者のほかの著作に親しんでもおりません。もちろん、何かの縁がないと翻訳してはいけないわけではないでしょうが、そういう私がなぜこの翻訳に手を染めてしまったかということをお話しておくことが本書のご理解にもまた拙訳の言い訳にもなるかと思ひます。

この本の初版は四半世紀前の 1990 年に出版されました。これを当時、訳したことが今回の「3.0」の翻訳につながるのですが、その時のあとがきでもちよっと触れたように、私は、かつてスイスを対象としたガイドブックを執筆したことがあって、そのさ中に、スイスの何が観光的かという問題に突き当たったのです。より正確には、「そもそも何が観光的」なのか、という根源的な問題に逢着したのです。たかが観光ガイドブック執筆で大きさと笑われそうですが、そのモヤモヤした問題は、まずアルプスについて始まりました。巨大で不毛な岩の塊でしかない、いわば負の表象をまとった山々が、ルソーなどの言説以来、サブライムだとか、ロマンチックだとか牧歌的風景とかの表象をまとい、これが観光の対象になっていった、そのメカニズムにはどんな原理が潜んでいるのだろうということでした。

スイスに「ハイジの修行時代と遍歴時代」*Heidis Lehr- und Wanderjahre* という小説があります。ご承知のように、この作品は、19 世紀の、キリスト教的教養小説です。もちろんジャンルとしては青少年の文学ではありますが。この小説は、日本では「アルプスの少女ハイジ」というタイトルで知られ、とくにアニメになってから、たいへん評判になりました(いまでもその評価は変わっていないとおもわれますが)。そして、この作者ヨハンナ・シュピリ Johanna Spyri が休暇に滞在していたマイエンフェルトという、観光などとは縁のなかったライン河の河畔の、平地(標高 504m。ちなみにスイスの首都ベルンは 540m)にあるブドウ畑の村が、いつの間にか日本人の女の子だけが群がると言って過言でない(最近まで外国人にはほとんど知られることのなかった)「アルプス」観光地にまでなった不思議さですね。こういうモヤモヤを解いてくれたのが、たまたま目にした本書の冒頭に引用されたミシェル・フーコー Michel Foucault の一文と、それに続く本書の議論でした。

本書によると「世界は自明なものとしてあるのではなく、見えるということは、人が学び取った文化的慣習でしかない」ということです。ここに登場するのが、「見える」ということ、すなわち「まなざし」という鍵概念です。これによって私の疑念は大方解けたという思いがしました。同時にこの観光理論はけっこう斬新なのではないかと、つい、翻訳にとりかかっ

てしまったというのがそもそものいきさつなのです。このたびその新版である「3.0」の翻訳を上梓しましたが、それは初版の後始末という意味でさせていただいたものなのです。

2

ではさっそくですが、*The Tourist Gaze 3.0* におけるジョン・アリーの議論の簡単な紹介から始めさせていただきます。

まず、この著作の構成を示しておきます(話の都合上、以降は *The Tourist Gaze 3.0* を「観光のまなざし」と呼ばさせていただきます)。資料1をご覧ください。

【資料1】

John Urry and Jonas Larsen: *The Tourist Gaze 3.0* (London: Sage Publications, 2011)

邦訳題名 『観光のまなざし[増補改訂版]』法政大学出版局 2014年

§印は小見出し(ただし、各章の「はじめに」と「むすび」は省略)

1章 Theories 観光理論

§ 観光の意義 § 理論的アプローチ § 移動する世界

2章 Mass Tourism 大衆観光

§ 英国の海浜リゾートの発展 § 〈ブラッドフォード用海浜〉・海岸・海浜別荘

3章 Economies 経済

§ フォーディズムと脱フォーディズム § グローバル化 § 社会関係 § 戦略としての観光

4章 Working under the Gaze 労働とまなざし

§ サービスを演ずる § 飲食提供と顧客 § 弾力性と流動性

5章 Changing Tourist Cultures 観光文化の変容

§ モダンとポストモダン § 表象としての観光

6章 Places, Buildings and Design 場と建造物とデザイン

§ 場 § まなざしのためにデザインする § テーマ空間 § 遺産 § 新しい美術・博物館

7章 Vision and Photography 見ることと写真

§ 視覚性の歴史 § 永続への希求と写真のはじまり § コダック化

§ 商業写真の魅惑 § 写真と観光のまなざし § デジタル化とインターネット化

8章 Performances パフォーマンス

§ パフォーマンス転回 § 身体化したまなざし § 社会関係とまなざし § まなざしと場所 § 観光写真を演ずる

9章 Risks and Futures リスクと未来

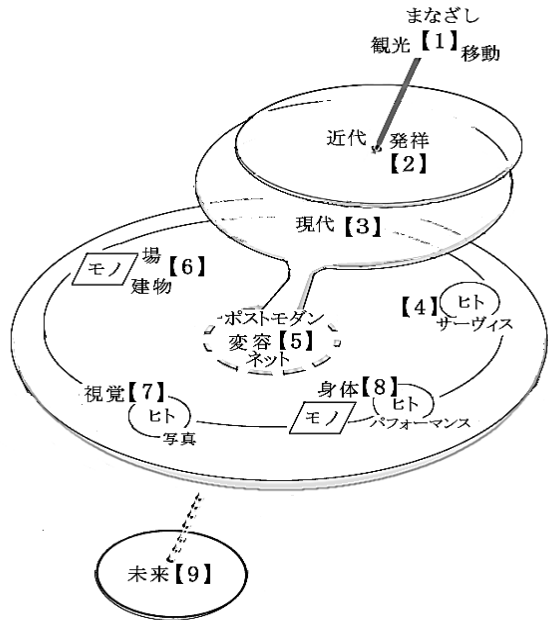
§ リスクと危険 § 場所と競争関係 § 石油 § 気候変動 § 未来 § ドバイ首長国

本書に目を通しておられる方には無用ですが、話の流れとして、「目次」を簡略化したものをあげました。ご覧の通り、本書は九章で成り立っています。

その構成ですが、これは資料2をご覧ください。

【資料2】

章立て構成の概念図（カッコ内の数字は章を表す）



これは章の構成概念図です。各章の主題をあげて、その内容を関連付けて図示してみたものです。

このすべてをここで解説することは省かせていただきますが、一例をあげて申し上げます。

たとえば第二章は観光の発祥を、イギリスを例として論じた章ですが、この章の含意は近代という、時代精神と密接に関係して観光という現象と行為が起こったということですので、これを「近代」という円盤に乗せて描きました。同様に、第三章は「現代」です。さらにこの現代はポストモダンという文化変容を内包しているのでこれを、現代からこぼれ出た円盤に乗せて描いてみました、すなわち、第五章です。この現代の大きなお盆

の上でサービスを扱った第四章、場を扱った第六章、視覚を扱った第七章、身体を扱った第八章が相関関係的に布置されているわけです。そして最後、第九章で、これらの観光現象を抜けて未来が描かれるわけです。この最終章は、ウルリッヒ・ベックの「リスク社会」論を援用した議論で、やや唐突に感じられますが、じつは、観光についての非常に根源的なことを露呈させている挑戦的な章だと、私などは見えています。以上が、私が見る、本書のおおよその構成です。もちろんこれとは、また、違う構造を本書に対して、持たれるかたもありましょうがとりあえず一つの解釈としてお示します。

資料1と2で、私が示したかったのは、本書はモノグラフの寄せ集めではないことです。また、雑多な観光事象をあれこれ寄せあつめて論じているものではない、という点です。このことは案外気づかれていないのですが、いままでにこのような構造的「観光論」は存在していなかったのです。

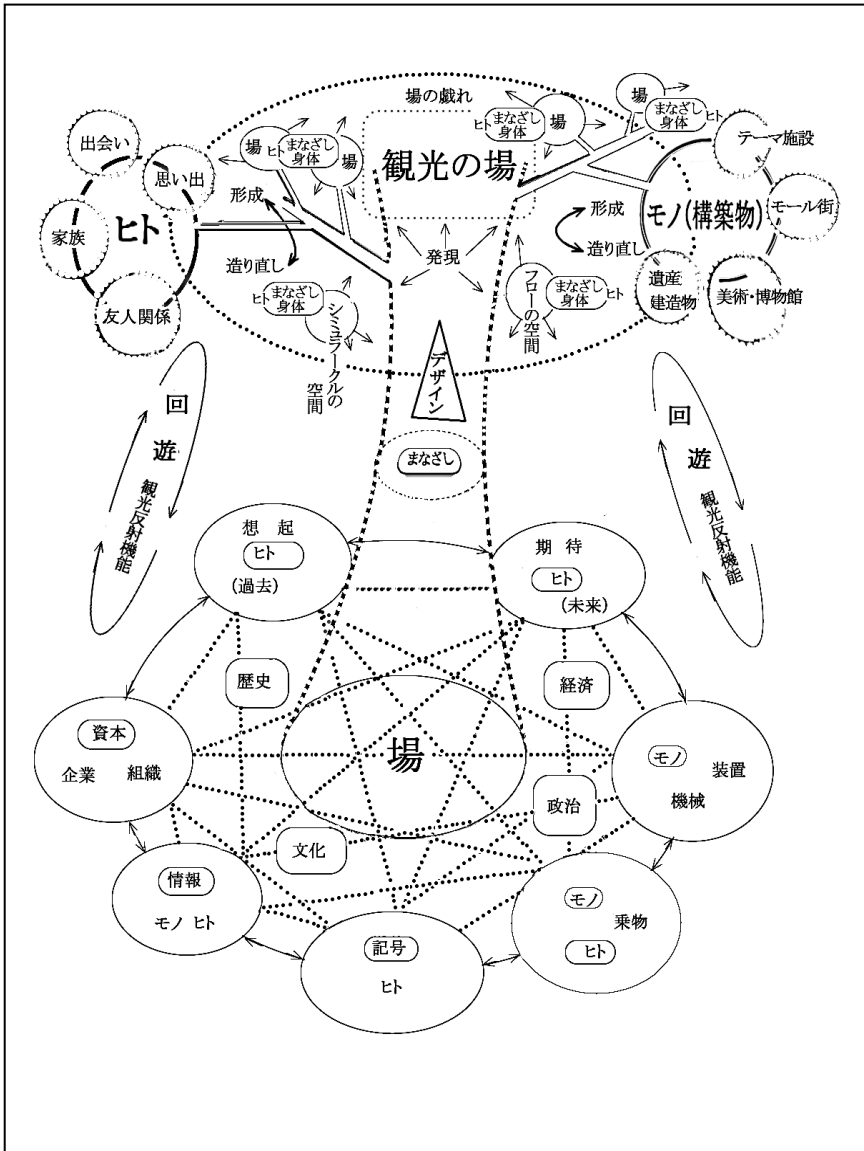
さらに、これら全体に張りめぐらされているのは、四つの問題意識です。

それは、①まなざしと視覚の問題、②身体とパフォーマンスの問題、③ポストモダンとネット世界の問題、④グローバル化と移動の問題です。この意識が本論を構造化しているのです。とは言いましても、その構造は、決して系統樹的といえますか、線型的なものではありません。むしろリゾーム状といっているかもしれません。

本書が世界で評価される理由は、以上でお分かりのように、各論を並べただけの、主題が総花的に拡散している従来の観光論とは異なっている点にあると思われます。

各章の構造については、どうなっているのか、第六章を例として取り上げ、少しお話したいとおもいます。

【資料3】



この図は、第六章(“場と建築物とデザイン”)における、観光の場・建築物の形成議論を、私がこころみに概念図化したものです。

ある「場」や「建築物」が観光対象となるのに、どういう要素が介在し、運動が生じるのかという本書の議論を図にしてみたものです。ご覧になればお分かりのように、「実体」と「現象」とがともに、脱構築的リズムになっていて、一方が他方の蜃気楼のように、多種の要素と運動により、複雑な相関関係をつくりつつ、一定の構造を成す、という図なのです。図の詳細については、ここではこれ以上述べませんが、このように先ほども少し触れましたが、本書は、実に多様な要素を多層的にからませて議論する相関関係的分析であるという特質をもっていることがお分かり頂けたかとおもいます。

ここからは、資料を用意しておりませんが、たとえば、観光サービスを論ずる場合(それは第四章ですけれど)、私たちが最近よく耳にする、

「おもてなし」などというような、薄気味悪い表現で論ずるホスピタリティー論とは、根本的に色合いが異なります。ここでの議論は身体、まなざし、場、経済、労働、雇用というような多様な変数を織り込んで社会的、文化的に分析され、しかも、個別ケースからはさらに小枝を出すという目配りがなされています。枝というのはたとえば、主に接遇に携わる人のセクシュアリティとかジェンダーとか人種とか身体障害がはらむ問題です。しかも、それらの小枝も「まなざし」原理という軸がきちん通されています。

もう一つ、例をあげて申しますと、これも資料が無いので恐縮ですが、第五章と第九章は、これを併せてみると、かなり関係的でしかも対照的な議論になっているという点です。関係的というのは、この両者、ともに「まなざし」の拡散的様態を現している、という意味です。一方、対照的というのは、五章が膨張的世界認識で、九章が収縮的視点にたつ世界認識という対比です。さらに、マクロなこの二つの視点が、ミクロな観光と連動するという二重性で描かれておりまして、一方は「まなざし」の拡散に、他方は「まなざし」の無化といいますが、無意味化、すなわち消失ということにも関連付けられているわけです。

さて、次に、本書にみられる特徴的な論点のいくつかをご紹介します。

私なりに、三つほど、取り上げてみます。

本書の議論は、先に申し上げたように、単純な単体をターゲットにしたものでなく、網目状の関連構造をもっているので、その一部を取り出して語るというのは、ふさわしくないかもしれないですが、あえて、次の三つの点を取り上げてみます。

まず一つ目が、初版に比べて、本書のキー概念である「まなざし」理論における議論の圧倒的な深化です。

まなざしによって規定される観光の現場に、身体の「パフォーマンス」を重ねて議論を展開している点に着目したいと思います。身体と視覚の相関関係です。これは主に第八章で詳しく述べられていますが、そこで扱われているテーマです。この全体を本書では、「パフォーマンス転回」という用語で述べています。その「転回」の動機は、大きく三点ありまして、第一は、観光者が求めているのは、たんに“見る”だけでなく、そこにいること、何かを行うこと、触れることなども含まれるという認識です。第二は、テーマ化され、舞台化されている観光地と、一方、台本化され劇場化された観光者の“身体”、その両者の関係を概念化してみようということです。第三は、自己呈示という演技を通して人は社会化している、というアーヴィング・ゴフマン Erving Goffman の議論をこれらの現象解明に援用してみたことです。この三点が、この新版における基本的なまなざし議論の出発点であるようです。

アーリの従来の議論からみますと、この変化は注目に値すると思われまます。たしかに、初版本では、ミシェル・フーコーのまなざし理論を中心にしていたのですが、新しい版では視覚と身体の双方に着目して、パフォーマンスを観光者の行為に限るだけでなく、ホスト側の行為や観光地という「場」にまで及ぼしています。そのことで観光の分析範囲が飛躍的に拡大しているのではないのでしょうか。また、このことは、別の意味で、ますます観光プロパーという概念の捉え方の難しくなっていることへの示唆とも読み取れます。

さて、二つ目の特徴的な議論ですが、これは、グローバル化とポストモダンの概念の重なり合いについてです。著者のアーリは、グローバル化を「移動社会」という観点で捉えています。

本来、経済や社会のグローバル化として把握された状況を、アーリは、資本・情報・人・文化の移動、すなわち世界の流動化現象の側面から捉えていることです。アーリは、概念用語である「スケープ」と「フロー」が絡み合って、観光者が世界をめぐるだけでなく、観光行為そのものが世界をめぐる、移民であれ季節労働者であれ難民であれ、場合によってはテロリストであっても、だれでもが移動の渦中であって、観光そのものの純粋抽出が行いにくくなりつつあることを述べているかと思えます。また、これは、別の次元での議論ですが、ポストモダンの特質である、あらゆる境界の溶解現象が観光にも及んでいるという指摘も重要です。レジャー、ショッピング、芸術行為(鑑賞、創造)、歴史(意味づけ、再構成など)、また身体など、こういうコト・モノの間にある差別化は消え、カッコつきの「観光」とあいまった「移動社会」が、相互に溶け合い、重なり合う現象が検討されています。

最後、三つ目の論点は、「内」へ向くまなざしという問題です。

内側へ、というのは、先進国の一定の階層〔イギリス式に言うところの“サーヴィス階級”〕に広がる、趣味の特殊な志向のことです。自然とか環境とか歴史についての意識ですが、たとえば彼らがもつ田園回帰だとか、自然食品やスローフードへの好みです。また古きモノや古き時代への懐旧趣味、たとえば街並み保存や古民家をリフォームして住むなどです。日本で言うと、「レトロ」とか「癒し」とか「自分探し」とかの流行語はやりことばに象徴されるものに似るかもしれませんが、こういう「内へ向く」とも言えますか、まなざしの個人的志向と観光との関係です。

その根底に潜んでいるのは、さきほどの移動社会や集散的まなざしから生ずる、大量規格生産などの普遍化へ向かう世界に対する反動と関係します。これは、情報化社会のビッグバンが内包しているネット時代のもう一つの結果、すなわち消費者側への権力移行とも関係がありますが、なにより歴史感覚の喪失が背景にあります。

この意味で、先進国における、第二次産業の衰退あるいは後退に伴う、「産業遺産」の保存という現象もテーマとなります。廃業した製造工場や閉山した鉱山など、こういうものを保存したいという意向は、実は、相当情緒的で私的な感情であって、本来の意味での歴史感覚ではないのです。また、企業活動から見れば、経済合理性に逆行する個人的感情でしかありません。けれど、思いを一巡すると、実は、保存というのは、場合によっては、経済的な収益と結びつく、ということが観光というファクターをそこに噛ませると可能だという理屈になります。イギリスを中心に実践されてきた遺産観光ですが、そのことに著者のアーリは、いち早く着目して議論しました。

日本でも、イギリスの政府機関の「遺産委員会」に遅れること四半世紀にして 2007 年になって、やっと「近代化産業遺産」という認定作業が始まり、「明治日本の産業革命遺産」のユネスコ登録を目指しています。尤も、これは観光庁でなく、経済産業省が行ったものですが。

アーリに議論をもどしますと、先ほど触れましたように、権力が消費者側に移転したという議論ですが、もちろん、ここにも、単純に語れない要素がからまっています。個人や家族やノスタルジックな感情という一見、私的に見えることがじつは、第二章で扱われているトーマス・クック社(海浜旅行)とか、第七章のコダック社(家族写真)を扱った論述をみれば感じられるように、そこには、どうやら、個人感情の観光産業化、という側面もあるのではないかと、ということです。別の言い方をすると、人々の「まなざし」を適切に捉えることが、観光化の可能性の唯一の点だということを証明しているのです。クック社は「あなただけの旅」という宣伝文句を使用し、人々を旅に誘っています。コダック社は、「あなただけ(あるいは家族の)思い出のために」というキャッチで、旅に出る人たちにカメラやフィルムを売る企業として出発したわけです。同様に、遺産を保護する運動は、「私たちの歴史」という標語で動きます。これは、内側へ向くまなざしすなわちある種のナショナリズムでもあるわけですが、まなざしである以上その当否は別として、観光に結び付き得る現象であるということです。

以上が本書における特徴的な視点と議論の一端ですが、これ以外にも多くの特徴的な議論があるのは私が言うまでもないことです。

3

さて、次に本書の議論を受けて私が感じた点を二、三述べさせていただきます。

まず、第一に、改めて言うのもなんですがまた何度も言及して恐縮ですが「まなざし」という理論の重要性です。観光対象は記号でしかない商品です。しかもその価値は社会的に編制されるという、この「観光のまなざし」理論が明らかにしたもの本質を、理解することの重要性です。その原理の理解からしますと、どうやら観光は、一般の産業政策の対象にするのは、向いていない事象であるということです¹⁾。

ここからあえて、少し、脱線気味に話をさせていただきますが、「まなざし」理論の観点から見ると、日本の観光政策は、どうなのでしょう。あまり詳しくリサーチしたことはないのですが、私はどこか違和感を覚えているものです。印象でモノを言うのは恐縮ですが、その施策は、1960 年代の産業成長主義やバブル期の言説を思わせます。関係者がいらっしやったらご勘弁いただきたいのですが、観光関係の白書とか諸報告書などをパラパラと見る限りでは、観光をアウトレット・モールのような、集客装置に見立てて、思いつく限りの販売促進策をてんこ盛りにしたという感じです。か

つての「観光基本法」が、平成 18 年に「観光立国・推進基本法」と衣装替えされ、さらにこの法律に基づいて「観光立国推進・基本計画」が策定されたあたりから、売り上げ至上主義企画になっていったような印象を受けています

観光開発事業促進のためと称した、インバウンドの数値目標何千万人とか、「カジノを含めた複合型観光開発」、さらに、全国に免税店を 2 万店に増やすとか、海外対応の ATM を約 8 万台にする、などの、要するに数を食するという施策が目白押しです。

もちろん、私も観光の経済効果を否定するものではありません。しかし、観光とは何なのか観光の根底にある人の慣習的行為とか文化的な様相やとくに国民生活や環境への配慮はどうなっているのでしょうか。

もう少し、観光施設を文化的環境として捉え、国民生活の向上や利便に結びつけるという視点はもてないのでしょうか。フランスのように「倫理的ツーリズム」とか「社会的ツーリズム」という配慮は必要ないのでしょうか。観光公害や、環境のオーバーユース、国民の中の社会的弱者へ目を向けた、休暇や旅行形態などへの福祉政策整備も弱いような印象を受けます。フランスやドイツ並みの休暇の取得制度は最大の課題でしょう。観光はモノでなく、コトです。しかし、わが国では、観光施策が、質でなく、量に偏重し、単純で功利的な施策が目立つのです。そのほか、多々あるようですが……、話しが脱線しすぎるので、閑話休題とします。

申し上げたかったのは観光というのは、表象の読み取りとかデザインで成立する文化的・社会的な複雑な現象(コト)であるということで、この理論が読み取れる「まなざし理論」を今一度、施策に携わる立場にある方々も確認していただければというのが、本書から、私が読み取った手前味噌な感想です。

第二に本書から感じた点は、研究方法についてです。観光研究における、非観光的・周辺理論の援用の重要さです。たしかに、フィールドワークや事例研究、すなわち観光実践の現場研究が豊富でないと観光の研究は始まりません。それは言うまでもないのですが、ここで言いたいのは、それを十分に補完補強する周辺研究の重要性です。これがわが国では弱かったのではないのでしょうか。本書でいえば、ゴフマン E.Goffman やソントグ S.Sontag やブルデュ P.Bourdieu やベンヤミン W.Benjamin、ベック U.Beck など、直接、観光をテーマにしない他分野の研究者の理論の援用や引用が、むしろ理論の裏打ちに使われているのです。

現場の声をくみ取るのは大切ですが、一般に、現場について、目配りするというと、単なる観光職務体験や観光現場の事例や官公庁施策レポートで終わってしまいます。たしかに、観光は通俗現象であり、また通俗行為です。素人でもこれを論ずるのにあまり抵抗がありません。しかし、そこに落とし穴があります。高度に学術的方法に裏打ちされた分析スキルなしに論じられてしまうからです。

学術的方法というのには、いろいろな意味があるでしょうが、ここでは、幅広い周辺研究からの高度な知見を常に参看しつつ成立するスキルである、としておきましょう。

その眼で本書を、もう一度、眺めると本書は、観光現場の事例をじつに多用しつつも他方、徹底した幅広く、ときに深遠などいえる観光以外の学術理論に支えられた著述だという特質をもっています。たとえば観光を「ロマン主義的」というような文芸概念と結びつけて「集合的」という概念と対置させて論ずるような大胆な越境姿勢が随所にみられます。観光の外に思い切って飛び出して、自由に「引用」をすることの大切さが本書からは感じられます。こういう水準で反省的に扱われない素人観光策というのは、現場にもまずい影響を及ぼしてしまう可能性があり、事実、過去にも甚大な被害を及ぼしたケースが、わが国には多々あったことは皆さまがご承知の通りです²⁾。こういうあやうい現場に抑止力を働かせることができるのは(間接的な意味で、ですが)観光研究者の責任でもあるかと感じています。

この研究手法にかかわることで、本書からもう一つ強く感じたことがあります。それはさまざまな領域から発信される観光論を相互に吸収することの重要性です。本書では、著者が、多様な領域から提起される観光論への踏み込みと、

そこからの援用を行い、種々の要素の相関関係を眺めながら観光全体のハイブリッド生成を描き出しているように感じます。

観光的事象を扱う研究に参入している経済学や経営学だけでなく、社会学や文化人類学、歴史学、地理学、場合によっては哲学などからの成果を、自由に取り込む作業を行っているのが本書の基本姿勢です。

私たち(とくに日本人研究者や官僚)は、どちらかという自分の帰属する専門領域での掘り下げに専一し、人様の領域へは踏み込まない、という暗黙の了解があるような気がします。よく言えば禁欲的なのですが、その結果、議論の幅が縮小再生産していくようなことが無きにもならず、です

ついでに、あえて三つ目として、こんどは、本書の気になる点もあげておきたいと思います。それは、Euro-centrismの視点ということです。もちろん著者がヨーロッパ人ですから、これはないものねだりなのかもしれませんが、観光の事例分析にもとづいて形成されていくはずの観光論で、そのケースが、仮にトルコであっても、そこへ行く観光者は、基本的にヨーロッパ人、というバイアスがかった分析などがやや気になるわけです。お気づきのように、本書では日本には存在しない「海浜リゾート」が大きくテーマの中心になっています。また、逆に、イギリスや西ヨーロッパには一般にみかけない「避暑」や「グルメ観光」や「女性に人気スポット」など、さらには「爆買」などの、東アジア人に特有の、慣習行動などへは目が向いていないようです。

なぜあえてそういうことを申し上げるかと言いますと、べつにポスト・コロニアル的視点をもてとかいう立場からでなく、単純に私たち東アジアからの独自の研究発信が少ないうえに、採用もされていないことを残念に思うからなのです。

以上が、「観光のまなざし」の議論に感じた印象と愚見・管見です。

4

最後に本書を受けて、今後の研究の展望について、私の考えることを少し申し上げます。

本学会に参加された大方の先生方のご意向を、失礼ながら、勝手に忖度させていただくと、観光学を、対象研究と言う一面を保持しつつ、一方で、その観光学を観光施策の準拠理論の一つとなるように高めたいということがあったのではないのでしょうか。

斯界では、対象分析や事例報告など、個々にはすぐれたものは蓄積されつつことは承知しております。しかし、観光政策や観光分析には、私の考えでは観光表象の原理的メカニズムへの参照を経ることが不可欠であり、そうだとするならば、これに資する一般理論への構築努力が今、求められているような気がします。

一般理論と言いましても、絶対真理を照らし出す聖典のようなものでないことは言うまでもありませんが、この構築への姿勢をお願いしたいわけです。少なくとも多数の人たちが参看すべきものという程度の力をもつもので、これを仮に名付けて「基礎観光学」³⁾とでも呼ばせていただきます。それを言うのは、観光をテーマにした講座が各大学に数多く創設されてきているにも拘わらず、その共通な基礎理論はまだ提供されていないように見えるからです。

もちろん、私が言うまでもなく、また本書が示す通り、観光学というプロパーなディシプリンがあるわけではありません。しかし、その扱いは“学術的”でなくてはなりません。もちろん、これに参入するのは、どういう領域からでも可能ではありません。ただし、各研究者の方が、観光の場で得られた知見を我が田に引くだけでなく、自らが、観光という新たなフィールドにも入り込み、「観光学」を新たな領域として構築していくようなある種の異分野総合研究にまで結実させるような方向性が今後確立していくことをおおいに期待したいものです。すでに、多くの先生方が真剣にその方法を披歴なさっているので、私のようなものが口を挟むのはほんとうに僭越なのですが。

ジョン・アーリは、少なくとも観光という対象を彼の専門である経済学や社会学という、我が田には引き込まず、逆に、自分の領域を全方位に開放した研究者だと思えます。そのこともあって、さらに、そこへ相互に批判的な議論が流れ

込むような可能性を拓きました。本書でも、まなざし論批判はもちろんのこと、たとえば、擬似イベントについて、ブーアスティン D.Boorstin に対するマッカネル D.MacCannell の批判とか、遺産観光ブームについてのヒュイソン R.Hewison の批判などが紹介されています。

さきほど、私も粗っぽいことを承知で、僭越ながら、あえて日本の観光政策への違和感を表明しました。もちろん、これとは異なるお考えをおもちの方もおられることは十分承知しています。私の意図は、現実には多様な意見が、学術的に議論され、知見として共有されることです。そして観光政策に対しても、観光関連企業に対しても、観光実態に対しても、適切に批判的であるというのがこの学会の果たす役割の一つだと私は勝手に思っております。この学会を、決して、観光学界「村」などにはいけないということは、言うまでもなく、皆さま共通の了解だと信じております。行政も、現場も、以上のような視点から、観光施策へのアプローチ〔方法論〕の一助として「観光のまなざし」は読んでいただければと考えています。

最後に、一言、日本からもっと、観光論文を世界に発信していただければと、切に願っています。本書での参考文献数は 630 を超えています、が、残念なことに日本からの論文は一つも引用されていません。どうか、さらに積極的に、欧米中心の観光メディアに東洋から別の視点を流し込むことにご尽力をお願いしたいと思っています。

自分のことは棚に上げて、口幅ったいことばかり申し上げました。引退する浅学のタワゴトと思い、どうかお許しをお願い申し上げます。本日のお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

観光学術学会

第4回全国大会 2015年7月4日(土) 於:阪南大学南キャンパス アッセンブリーホール

○シンポジウム『『The Tourist Gaze 3.0』を読む

基調講演:加太宏邦 (法政大学社会学部名誉教授)より
(当日の講演を元に、一部、字句や表現に手を加えた)

- 1)「まなざし」の理論が教えてくれているのは、その方策でいえば、“何もしないこと”という観光施策上の選択肢もあり得るのです。たとえば、イタリアのヴェネチアでは、そのコア地区では、町並みを開発しない、整備しない、大型ホテルを建てない、車や観光バスを乗り入れない、自転車すら通行させないという、抑止(“しない”)こそがこの街の観光記号の意味付加を増進し、同時に、オーバーユース対策にも資する、という逆説を教えてくれています。
- 2)ちょっと古い例で恐縮ですが、“夕張”ですね。観光振興政策と称して、「メロン城」という博物館をはじめとして、41もの“観光”施設をつぎつぎ建設して2007年について、353億円の赤字を抱えて、事実上破綻したのが北海道夕張市です。これには国も共犯関係にありました。つまり、観光施策は、現場の経験主義だけだと、とんでもない方向へ突っ走るリスクを常にはらんでいるという例だと思われます。そのほか、1987年「総合保養地域整備法」(リゾート法)で作られた観光保養施設(9割以上は破綻)やテーマパークラッシュ(ほとんど現在、壊滅状態です)も、こういう例の一つとして見るができそうです。
- 3)図書分類、出版社カタログ、書店配架などでみますと、「観光」が独立項目になっていることは稀です。社会学、文化人類学、地理学、歴史、行政などにその著書内容で振り分けられています。理由は、各著者にとって観光はあくまで素材で、自分の専門研究分野の研究に利用しているだけだからです。ここで、発想を転換して、あえて、観光を正面に据えて、せめて学会で、観光の概念用語の統一とか、必須主要理論(賛否は別として)制定などを行えないのでしょうか。ちょうど経済学において「需要と供給」とか「限界効用」とかの概念語習得が必須であり、また「経済学入門」という教科書的なものも一冊は必読であるというように。